

2016年度 非文字資料研究センター・国際シンポジウム

「东亚視域下的非文字資料研究／東アジアにおける非文字資料研究」

日 時：2016年7月2日（土）（9：00～17：00）
会 場：中国・浙江工商大学
共 催：浙江工商大学東亜研究院

新垣夢乃

（神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者）

G20 開催を控えた杭州にて

2016年7月2日と3日に、中国浙江省杭州市（歌江維嘉大酒店）において「东亚視域下的非文字資料研究／東アジアにおける非文字資料研究」というシンポジウムが開催された。このシンポジウムは、浙江工商大学東亜研究院と神奈川大学非文字資料研究センターが主催、浙江省中日関係史学会の共催によって開催された。

7月の杭州は、中国ではじめて開催されるG20の開催をおよそ2か月後に控えた状況にあった。そのため、すでに杭州蕭山国際空港やシンポジウムの会場となったホテルにおいても警備体制が強化されている状況にあった。空港では入口に金属探知機と警備スタッフが配置され、入場する人々の荷物検査を行っており、空港内部は小火器を携帯した多数の兵士たちが巡回警備を行っていた。また、飛行機で空港に到着した人々には、入国審査とそれに続く手荷物検査により長蛇の列が待ち受けており、空港を出るまでに長い時間を要した。さらに、シンポジウム会場となるホテルでは、入場する者が1階のエレベーターホールにおいて警備スタッフによる宿泊者・関係者リストとの照合作業を受ける必要があった。このように、所どころで緊張した場面に遭遇し、不便さを感じることもあった。

だが一方で、G20開催地となった杭州では、G20開催を祝う標語や看板もあちらこちらで見受けられた。空港での長蛇の列、ホテルでのチェックには辞易したが、今から振り返るとそのような時期の杭州を見られたことは貴重な経験であったと思う。

本稿においては、そのような状況のなかの杭州で開催された「东亚視域下的非文字資料研究／東アジアにおける非文字資料研究」で行われた各研究発表について紹介することにしたい。

「東アジアにおける非文字資料研究」シンポジウム

シンポジウムは、以下のプログラムで行われた。

〈7月2日 09:00～16:50 於：歌江維嘉大酒店 望江庁〉

【開催の挨拶】09:00～09:20

司会：張新朋（浙江工商大学東亜研究院副教授）

歓迎の辞 王勇（浙江工商大学東亜研究院院長・教授）

挨拶の辞 内田青蔵（神奈川大学工学部教授・非文字資料研究センター長）

【第1セッション】09:20～12:00 1人20分

司会：許海華（浙江工商大学東方語言文化学院講師）

①「西湖・杭州の夢と日本の風景或いは絵画」

報告者：鈴木陽一（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

②「『旧満州・旧関東州・旧中華民国』に建てられた日本神社の跡地について」

報告者：稲宮康人（神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者）

③「戦時下紙芝居研究—『戦意高揚紙芝居コレクション』資料の概要、研究の現状・展望—」

報告者：新垣夢乃（神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者）

④「『18世紀ヨーロッパ生活絵引』から見る都市の祝祭空間」

報告者：熊谷謙介（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

⑤「租界研究で分かったこと、今後の課題」

報告者：孫安石（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

コメント：1人10分

陳小法（浙江工商大学東亜研究院）

張新朋（浙江工商大学東亜研究院）

許海華（浙江工商大学東方語言文化学院）

中島三千男（神奈川大学名誉教授・非文字資料研究セン

ター客員研究員)

【第2セッション】14:00～16:30 1人20分

司会：孫安石（神奈川大学外国語学部教授・非文字資料研究センター研究員）

⑥「明代文献における琉球人像—明代類書を中心に—」

報告者：陳小法（浙江工商大学東亜研究院教授）

⑦「《兩點千字文圖解》所配図像解析」

報告者：張新朋（浙江工商大学東亜研究院副教授）

⑧「古代日本における瘟神祭祀研究」

報告者：姚瓊（浙江工商大学東亜研究院講師）

⑨「日本における宋風石刻の伝播について」

報告者：郭万平（浙江工商大学東方語言文化学院副教授）

⑩「指画家羅清と『羅源帖』」

報告者：許海華（浙江工商大学東方語言文化学院講師）

コメント：1人10分

鈴木陽一（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

大里浩秋（神奈川大学名誉教授・非文字資料研究センター客員研究員）

熊谷謙介（神奈川大学外国語学部准教授・非文字資料研究センター研究員）

中島三千男（神奈川大学名誉教授・非文字資料研究センター客員研究員）

【閉幕式】16:40～16:50

司会：陳小法（浙江工商大学東亜研究院教授）

閉幕の辞：王宝平（浙江工商大学東方語言文化学院教授）

：中島三千男（神奈川大学名誉教授・非文字資料研究センター客員研究員）

：大里浩秋（神奈川大学名誉教授・非文字資料研究センター客員研究員）



写真1 張新朋氏による開催の挨拶



写真2 内田青蔵氏による非文字資料研究センターの紹介

以上が、シンポジウムのプログラムである。では次に、具体的に個々の報告内容について紹介する。

「西湖・杭州の夢と日本の風景或いは絵画」

鈴木陽一氏は、近世期の日本列島各地の人々が杭州とそのシンボルである西湖にかんする絵画や漢詩、漢文を受容するなかで形成した杭州と西湖のイメージ像が与えた影響について、具体的な事例を交えて報告を行った。

鈴木氏は、まず、和歌山県和歌山市の和歌浦の事例を取り上げた。和歌浦に浮かぶ小島では、1648年から1649年にかけて当時の紀州藩主である徳川頼宣によって多宝塔などの造営に伴い島の整備事業が行われた。その際、3つのアーチを持つ「三断橋」という石造りの橋が築かれた。この整備事業における景観造りは、西湖を意識したものであるという。さらに、三断橋の建築から約150年後に記された『紀伊國名所圖絵』（1811年）においても、三断橋が西湖を意識して建築されたことが示されているという。

三断橋の建築の後も、紀州藩では第10代藩主である徳川治宝（1771－1853）によって、和歌浦の整備が行われている。その際には、和歌浦の景観をより西湖に近づけることを意識した整備事業が行われたという。

さらに、当時の和歌浦の事例を分析するなかで鈴木氏は2つの課題も示している。1つが、中国大陸からの亡命者が急増する元禄期よりも10年以上前に、西湖を意識した景観造りが行われている理由を明らかにすることである。2つ目が、和歌浦における西湖を意識した景観造りにおいて、西湖を代表する橋梁である白堤や断橋ではなく、蘇堤の六橋が題材に選ばれている理由を明らかにすることである。

2つ目の事例としては、鳥根県津和野市の事例を取り上げている。そこでは、津和野市の永明寺にある襖絵の西湖図を紹介した。



3つ目の事例としては、三重県鈴鹿市の桜島公園と三重県津市の千歳山公園を取り上げている。この2つの公園はどちらも、近世期には津藩の領地であった。桜島公園は、1810年代に当時の津藩藩主の命により、吉田重麗という藩群奉行が農民たちと協力して開墾、灌漑を施した場所であった。この吉田という人物は、津藩藩校督学の津坂東陽という人物の弟子である。この時の開墾においては、貯水池を浚渫した土砂で小島が造営された。この小島には、桜や紅葉を植樹し、橋梁を架けるなど西湖を意識した事業であったと鈴木氏は分析している。さらに、千歳山公園も、1823年に藩主の命により津坂が整備事業を行った地域である。千歳山公園においても、池を浚渫して発生した土砂で丘陵をかき上げし、そこに桜、紅葉、柳などが植樹されている。鈴木氏は、ここにも西湖のイメージをモデルとした景観造りがあったと分析している。

それらの事例から、鈴木氏は、近世期の日本列島各地で杭州と西湖のイメージが大きな影響を与えていたという分析を示している。その一方で、この杭州、西湖イメージのもととなった原像は時代や場所によって異なる可能性も示唆している。さらに、それぞれの原像をもとに形成されたそれぞれの杭州、西湖イメージは、それを受容したそれぞれの地域の風土、歴史、文化などの要因により多様な形で具体化したのではないかという見解を示している。最後に鈴木氏は、その多様な具体化の現れ方を読み解くことで、それぞれの地域の文化的特色を読み解くことができるかもしれないと、杭州、西湖イメージを経由した日本の地域研究の可能性を提示した。



写真3 鈴木氏の報告場面

「『旧満州・旧関東州・旧中華民国』に建てられた日本神社の跡地について」

稲宮康人氏からは、戦前の満州、関東州、中華民国地域に建てられたそれぞれの神社の現状が報告された。こ

の報告は、各地の神社を訪ね歩いた膨大なフィールドワークによって得られた写真やインタビュー資料などをもとにしたものである。

報告では、非文字資料研究センターにおいて長年蓄積してきた海外神社跡地にかんする研究成果についても紹介された。そこでは、海外神社跡地が戦後どのように利用されてきたのかについて、「復活」、「再建」、「放置」、「改変」という4分類も示された。また、「海外神社」にかんする先行研究の概況も整理して紹介され、「旧満州国」地域の研究が多く存在する一方で、「旧中華民国」地域の研究が手薄であるということが示された。さらに、「旧満州国」地域のなかでも、いわゆる開拓村に造られた神社については現状がわかっていないという研究状況が説明された。そして、海外神社調査の基礎資料となっている佐藤弘毅氏が作成した「戦前の海外神社一覧」から漏れている企業内や日本人居留地、軍の駐屯地などに造られた小祠などが多数存在することが紹介された。それらの小祠は、当時の新聞や雑誌、地図などから見つけることができるという。これらの小祠は、海外神社跡地研究の新たな課題として提示された。

また、新しい研究の萌芽となる話題についてもいくつか示された。1つは、海外神社にかんするインタビュー資料などから、海外神社が存在していた時期の運営のされ方についても分析しようとする試みであった。2つ目に、戦時中の1942（昭和17）年に写真家である名取洋之助、詩人の草野心平、同盟通信社上海支局長の松方三郎らが海外神社を造ることを批判した「対抗運動」が紹介され、この「対抗運動」をどのように考えることができるかという試みが示されたと思う。

最後に今後の課題として、3つのことが示された。1つは、海外神社、海外神社跡地にまつわる個人体験の掘り起こしを進めること。2つ目は、他地域の海外神社研究の成果との比較、検討作業により「旧満州」、「旧関東



写真4 稲宮氏の報告場面

州、「旧中華民国」地域の海外神社跡地利用の特徴を明らかにすること。3つ目が、今までに確認されていない神社の掘り起こしを進めることである。

「戦時下紙芝居研究—『戦意高揚紙芝居コレクション』資料の概要、研究の現状・展望—」

筆者は本報告で、2014年から神奈川大学非文字資料研究センターにおいて進められてきた戦時下日本の大衆メディア研究班（通称：紙芝居班）の研究状況の紹介を行った。

まず、はじめに中国では紙芝居は馴染みのないメディアであるため、紙芝居がどのような物であるのかを紹介した。紙芝居は、その誕生当初、子ども向けのメディアであった。ところが、1930年代後半から国策宣伝や戦意高揚、銃後の暮らしのあり方などを説くいわゆる「国策紙芝居」とよばれる物が登場する。そして、神奈川大学は、総数241点に及ぶ「国策紙芝居」のコレクションを所蔵しており、それらの資料をもとに共同研究プロジェクトがスタートしたという経緯を紹介した。

そして、共同研究によって「戦意高揚紙芝居コレクション」の分類、つまり、それぞれの作品の性格分類が進められていることを紹介した。さらに、台湾における国策紙芝居の残存状況調査、国策紙芝居を実際に見た方々へのインタビュー調査などを進めていることも紹介した。

最後に、戦時中の中国大陆において、日本軍によって占領されていた地域の紙芝居活動を明らかにするという今後の研究課題を示した。そこでは、戦時中、当該地域では紙芝居が「宣撫」活動の手段として用いられており、その実態を明らかにすることが課題であるとした。また中国南方地域においては、陸軍情報部と台湾総督府が台湾人の協力を得て、アモイに設置した「共栄会」の下部組織として「華南画劇協会」という紙芝居活動を担う団体も組織されていた。それらの団体が戦時下、中国の占領地においてどのような紙芝居活動を展開したのかを明らかにすることが、具体的な今後の課題であるとした。

「『18世紀ヨーロッパ生活絵引』から見る都市の祝祭空間」

熊谷謙介氏による本報告では、まず、川田順造氏が提唱した「文化の三角測量」が紹介された。それによって、大きく、都市の生活絵引研究を日本、フランス、中国と広げる可能性を示した。これは、「東アジアにおける非

文字資料研究」というシンポジウムを新たな視覚から見るための具体的な手段を示すものであった。そのため、熊谷氏による報告では、文化の三角測量に資する資料を提供するために、まずは18世紀ヨーロッパの都市における祝祭の場の位置、機能の分析が行われた。特に、①都市における祝祭空間はどこにあるのか？②文化施設と商業施設の関係は？③都会のオアシス：新しい祝祭空間としての大通りと「自然」、という3つのアプローチから分析が行われた。

18世紀のパリでは「大市 (FOIRE)」とよばれる催し定期的に開催されていた。この大市は、ノートルダム大聖堂などの宗教施設が敷地を提供したり、開催する権利を有していた。さらには、聖遺物信仰のために集まる人々を対象に開催されるなど、宗教や信仰と関係する場所で大市が開催されていた。この大市は、商店とともに芝居や見世物なども上演される場であった。そこから、商業施設と文化施設が複合した遊興施設としての大市の特徴を提示された。

さらに熊谷氏は、18世紀のパリで取り壊された城壁の跡地がそのままパリを取り巻く「ブルヴァール (大通り)」となった事例も紹介された。ブルヴァールは、都市と郊外の間であり、街路樹が立ち並ぶ「田舎風」の散策道となった。そこには、芝居小屋や商店、トルコ・カフェなども存在した。そのため、ブルヴァールは、パリの人々にとって新たにつくられた「自然」の場であり、同時に祝祭空間としての側面も持つ場であったという。

それらのことから熊谷氏は、都市における祝祭空間は、周縁、城壁近く、ブルヴァールに生じたという分析を提示された。さらに、このような都市の周縁に発生する祝祭空間という18世紀パリの事例分析から得られたことが、他のヨーロッパ地域の都市、アジア地域の都市ではどうだろうかという形で問題提起をされた。また、「図像分析」以外に非文字資料研究として考えるべきことは

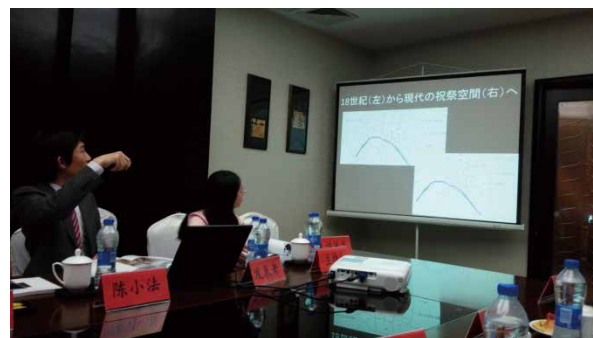


写真5 熊谷氏の報告場面



なにかとして、文学・芸術（高等文化）研究と大衆文化研究の関係をどう捉えるか、という問題も提起された。

「租界研究で分かったこと、今後の課題」

孫安石氏による本報告では、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムとその後の非文字資料研究センターにおいて、2003 年から現在まで継続されてきた租界研究の総括と今後の展望が示された。

それによると、現在進行している「中国・朝鮮の旧日本租界」共同研究（2014 年度から 2016 年度）においては、上海などの調査を継続するとともに、新たに九江（江西省九江市）、沙市（湖北省荆州市沙市区）、漢口（湖北省武漢市）などの中国内陸部長江沿岸の港湾都市の租界についても調査地域を広げていることが紹介された。その研究成果として、建築学との交流を継続しながら租界研究を行っている点、日本国内の外国人居留地研究者との研究協力体制の構築がなされた点を挙げた。

それらの成果を踏まえ、今後の課題として「租界班の研究の継続」、「租界研究の制度的な研究から個別研究テーマへ」、「租界とネットワーク」という 3 つの課題が示された。この「租界とネットワーク」については、新聞社などが構築していた租界間および租界と当時の日本国内の間の情報通信網についての調査研究という課題が示された。さらに、1910 年という早い時期に中国全土を網羅した石油備蓄体制を確立した、アメリカのスタンダード石油の情報通信網などについて調査研究を進めたいという具体的な研究課題も提示された。

「明代文献における琉球人像—明代類書を中心に—」

陳小法氏による本報告では、明代のさまざまな日用類書（一般の人々向けの百科事典に類する書籍）に描かれた琉球人の姿の分析を通して、明代の普通の人々が持っていた琉球、琉球人イメージや知識を明らかにしようとしていた。

陳氏の報告では、『新鐫全補天下四民利用便観五車抜錦』（1597 年）、『新刻天下四民便覧三臺萬用正宗』（1599 年）、『類聚三臺萬用正宗』（1609 年）、『新全補土民備覧使用文林匯錦萬書淵海』（1610 年）、『新板全補天下使用文林妙錦萬宝全書』（1612 年）、『新刻搜羅五車合併萬宝全書』（1614 年）という 6 つの日用類書、『三才図会』（1609 年）と『東夷図像』（1586 年）という 2 つの書籍に描かれている琉球人像が使用された。

これらの琉球人像の分析から、陳氏は次のことを指摘

している。1 つが、明代期には、「大琉球」と「小琉球」について明確な区別が存在していたこと、2 つ目が、大小琉球が「羸虫類」などに分類されているということ、3 つ目が、大琉球にかんする地理方位、風俗、特産物などが確認され、琉球と明との交流の歴史により得られた知識が民衆レベルへも広がっていたということ、4 つ目が、明代の日用類書において描かれた琉球人像は、日用類書の作者の憶測にもとづいて描かれたものが多いということである。陳氏は、以上の 4 点のことを、明代の日用類書に描かれた琉球人像の分析により示された。



写真 6 陳氏の報告場面

「《兩點千字文圖解》所配図像解析」

千字文とは、502 年から 557 年に編まれた長文の漢詩である。その特徴は、1000 の漢字を 1 字の重複もなく編まれている点にある。この千字文は、漢字を学ぶ子どもたちの教材としても長らく用いられてきた。

張新朋氏は、この千字文のなかに挿絵として描かれている図解に注目した報告をされた。それは、千字文のなかに描かれた図解がどのような物であるのか、どのように配置されているのか、文字の内容と図解の関係性について豊富な資料をもとに分析したものであった。

「古代日本における瘟神祭祀研究」

姚瓊氏による本報告では、奈良、平安時代の疫病流行時に行われた祭祀の分析がなされた。そこでは、『続日本紀』、『延喜式』、『貞観儀式』、『政事要略』、『令集解』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』などの古代史資料が用いられている。それらの資料から、次のような分析を示されている。奈良時代には中国大陸の影響を受けた疫病退散儀礼が行われていた。それが平安時代には御霊会信仰へ、その御霊会信仰も次第に疫病退散儀礼化していく、いわば独自化していく疫神祭祀の展開過程が示された。

私事ではあるが、報告者の姚さんと筆者は大学院生時代の同門の同期生であり、「疫神」、「疫病退散儀礼」、「御霊会」という言葉を聞くのは大学院のゼミ以来で、大変懐かしい思いがした。この院生時代からの経験も踏まえながら、姚さんの報告の感想を述べたいと思う。姚さんは、もともと『古事記』などの研究をしていたいわゆる古代史研究の分野にいた人である。それが、大学院博士課程では現在の日本各地で行われている疫病退散儀礼に注目し、秋田や神奈川、大阪、三重などの地域でフィールドワークにもとづいた調査研究を行った経歴を有している。このようなバックボーンから姚さんは、疫病退散儀礼の連続性と「現代化」(姚さんの言葉である。しかし、民衆レベルの信仰において現代化=その時々々の状況への対応が起こらないものがあるのかは疑問がある)過程を描き出す研究を展開してきた。そこには、古代への視線と現代への視線の双方を併せ持ち、双方向に思考を行き来させる発想があった。それが姚さんの強味、特徴であったと思う。筆者は古代史や信仰儀礼については門外漢ではあるが、姚さんが大学院修了後、中国へ帰国し、いわゆる古代史の研究へ戻られたのは少し寂しい感じがする。今ある疫病退散儀礼を古代から手繰るのではなく、もう一度、現在を生きる人々を基礎に置いた発想を持って欲しいという感想を持った。今ある疫病退散儀礼を現在から過去へ手繰りながら連続性というものを考えた時に、どのような問題が見えてくるのかという姚さんの手法も活かしてほしいと思った。



写真7 姚氏の報告場面

「日本における宋風石刻の伝播について」

郭万平氏による本報告は、平安時代から鎌倉時代にかけて日本列島に分布した「宋風石刻」の分析を通して、当時の中国大陆と日本列島の交流の一端を明らかにしようとするものであった。郭氏は、宋風石刻を①宋人の石工が日本で作った石刻遺物、②中国大陆産の石材を使用

した石刻遺物、③宋人の石工の手によるものではないが中国風の形状や飾り彫刻技法などを有する石刻遺物、④宋人の石工が中国大陆で作り日本へ渡った石刻遺物、と定義されている。今回の報告で郭氏は、特に「薩摩塔」とよばれる石造物と宝篋印塔を資料として分析している。

郭氏は、薩摩塔にかんする豊富な先行研究を整理され、いわゆる「硫黄の道」と薩摩塔分布を関連させて説明された。中国大陆に起源を持つ宝篋印塔は、日本列島全域に大量に存在する。郭氏は、宋代に宋へ留学した僧侶たちが目にした宝篋印塔イメージが日本列島へ伝来したという外部要因、平安時代から鎌倉時代に仏教が発展したという内部要因の双方の要因により、宝篋印塔が日本列島で大量に作られたという分析を示された。さらに、叡尊と忍性という2人の僧侶の宣教活動において宝篋印塔が用いられ、それが日本列島に広く宝篋印塔が分布するきっかけを作ったという。また、鎌倉時代の1260年ごろから1290年ごろの期間は、宝篋印塔が作られない空白期間があるという。それについて、元寇研究の専門であられる郭氏は、一度衰退した宝篋印塔が元寇後の1290年ごろから戦死者を供養する目的から再び宝篋印塔が作られるようになったのではないかと、という見解を示された。

以上のことから、郭氏は、仏教を媒介とした日本列島と中国大陆の交流の側面、宋日貿易が経済面にとどまらず文化交流という点でも大きな役割を果たしたことを示された。



写真8 郭氏の報告場面

「指画家羅清と『羅源帖』」

許海華氏による本報告は、羅清という絵筆を使わずに自分の指や爪を使って絵を描く1人の「指画家」の作品や関連資料をもとに行われた。指や爪で絵を描く画法もユニークだが、この羅清という画家個人の存在もおもしろいという。羅清は、明治初期に日本へ来て滞在して



いる。そこで、後に明治政府の高官となる松本良順やさまざまな人々と、絵画や漢詩を通じた交流を行っている。許氏の報告では、この羅清の交流のツールであった絵画や漢詩などをもとに、羅清が当時どのような交流を行っていたのか、その交流がどのような意味を持っていたのかを探ろうとするものであった。



写真9 許氏の報告場面

浙江工商大学東亜研究院への謝意

今回のシンポジウムは、浙江工商大学東亜研究院の多大な努力によって開催することができたものである。G20を控えた時期であったため、外国人を招聘したシンポジウムの開催には当局側との複雑な交渉や手続きを要したという。さらにシンポジウムが開催された同日には、同じホテルの隣接する会場で、中華日本学会による「暨“东亚视阈下的日本研究”学术研讨会」（「東アジア地域からみた日本研究」学術研讨会）という大規模のシンポジウムも開催されていた。この大規模なシンポジウムも同じ浙江工商大学東亜研究院の方々がホストとして開催したものであった。そのため、浙江工商大学東亜研究院の方々は、2つの異なる内容のシンポジウムを準備し同時に進行してくださったのである。このような多大な努力によって、今回のシンポジウムは開催することができた。



写真10 「暨“东亚视阈下的日本研究”学术研讨会」会場

また、このような多忙な状況のなか浙江工商大学東亜研究院の方々には、シンポジウムの直前や合間、終了後に杭州市内の日系企業工場、銭塘江、西湖、浙江省博物館、大運河、洪宸橋とその周辺地域、旧租界地域などを案内していただいた。それは、現代の杭州の姿、近代の杭州の姿、古代の杭州の姿というそれぞれの時代の杭州を感じさせるものであった。改めて、杭州という都市が持つ歴史の深みを実感する貴重な経験となった。ここで、浙江工商大学東亜研究院の方々に改めて感謝の意を示したいと思います。



写真11 杭州のパナソニック工場



写真12 パナソニック工場見学の様子



写真 13 浙江省博物館



写真 14 洪宸橋



写真 15 運搬船が往来する大運河



写真 16 西湖の畔にある旧蔣経国邸
(現在は建物がマクドナルドとして使用されている)

個人的には、今回のシンポジウムで得られた知見や、人との交流、特に中国の同世代の方々との交流をさらに深めていければ幸甚と考えている。また、今回のシンポジウムを糧とし、今後、浙江工商大学東亜研究院と神奈川大学非文字資料研究センターがさらに連携を深め、協力体制を築くことができればと願っている。